

私は古寺山くらぶというひと月に1度山歩きをするグループをやっています、そこで歴史の解説や案内をしています。古寺山というのはご存知ない方もいるかもしれませんが、シュラインロードの石仏の真下の裏六甲ドライブウェイの交差しているところに鳥居があり、その北側にある636mほどの山です。唐櫃から神鉄六甲に近く、そこから2kmほどのところですよ。

今日のご縁があり、お話の機会を頂きました。ここは記念碑台でグルームさんとゆかりが深い場所ですので枕としてそのお話からします。ここにイギリス人グルームさんの胸像と101の石標レプリカがあります。明治の中頃に三国池の別荘に置かれたものが101の石標です。登山道を開発して六甲山の開祖と言われています。お手許の新聞記事にありますが、アメリカとの戦争がきっかけで敵国人の像は撤去しろということで引き倒されてしまいました。上高地でも日本アルプスを世界に紹介した英国人の登山家ウエストンのレプリカも軍部の圧力で取り外されました。いかに戦争が人々を排他的にしたのかを思い知らされる事件です。戦後グルームさんも復活し、6月5日をチャレだと思いますが「六甲の日」として、神鉄六甲側と海側と同時にハイキングを行い「六甲山夏山開き」「グルーム祭」として親しまれる存在になりました。

グルームさんが六甲山の開祖という意味について考えてみたいと思います。グルームさんは登山道や山荘を作ったり山上のスポーツでも4コースのゴルフ場を開いたりして日本でゴルフの始まりとなっています。一般の人にレジャーという感覚をもたらしました。日本でのレジャーの始まりとも言えます。元々は六甲山は唐櫃村のものでしたが、山荘を開いたりして外国人が増え、駕籠や輿を使うようになりました。唐櫃村はあまり豊かではないから駕籠かきやゴルフ場の雑用なんかをして村にお金が入るようになりました。グルームさんが山を開いたので大正時代には毎日登山が盛んになり、1万回を越すほど毎日登山をする人もいます。大龍寺の大師道は典型ですよ。

山を開放する以前には一般の人々にとって山は怖いところでした。山は特別な人間しか利用しませんでした。むしろできれば山には近づきたくないという感覚だったのです。最初に山に注目したのはおそらく山を活動の舞台にしていた宗教者でした。

古寺山は法道仙人が開いたということで、法道仙人に触れてみたいと思います。大化の改新、今は乙巳の変というようですよ、それと同時代、つまり7世紀の半ばごろですよ。あくまで伝承ですよ、特に有名なのが西国二十六番法華山一条寺で、インドから百済を渡って飛んできた法道仙人が開きました。空鉢仙人とも言われ、空中を遊泳することが得意でした。25番の播州清水寺も法道仙人が開いたと言われています。六甲山で言うと多聞天がいるのを感じて降り立ったと言われているのが雲ヶ岩ですよ。その後法道仙人がお寺を建てるところを探して建てたのが古寺山の旧多聞寺ですよ。法道仙人が開いたお寺はたくさんあり、摩耶山天上寺奥之院なども同様でそこには天狗岩という巨石があります。その他、北区八多町にある460mほどの大蔵山という山のお寺にかつて奥蔵寺というお寺がありましたが、戦国時代に秀吉に滅ぼされてしまいました。又、丹生山や西宮鷲林寺…ここは空海が開いたともいわれますが…法道仙人は兵庫県内に100カ所以上の寺を開いたと言われています。宗教者が開いた山と山を結ぶルートというのができて資料に2つの村を結ぶルートと書いてありますが、旧多聞寺は源平の合戦で滅ぼされてありませんが、今は神鉄六甲駅のところに移されてそこは六甲山吉祥院多聞寺となっています。西宮鷲林寺も六甲山鷲林寺となっています。鷲林寺から多聞寺をたどる宗教者のルートがあるとされています。聖地を巡るようになっています。鷲林寺近くの山、観音山を抜けて最高峰近くまで行くと石の宝殿があり、菊理姫を祀っています。そこから雲ヶ岩を通りシュラインロードにある行者道、多聞寺へと行くルートが考えられています。巨石を回って修行する、あるいは各峰を回って修行すると考えられています。山岳宗教者白山系の修験道の場として、各地に天狗岩がいくつもあります。

そのうち宗教者が開いた拠点やルートを軍事的に使うようになってきました。有名な例では古寺山や丹生山は平家の時代に全盛期を迎えますが、平家は山に僧兵を配置し軍事的な拠点として利用していました。南北朝時代摩耶山城や多々部城を築いたりして鎌倉幕府の六波羅や後醍醐天皇側の武将と対峙したりしました。各地にのろし山というような伝承があるのですが、最初宗教者が使った拠点を軍事的に利用することが行われるようになりました。それがだんだん近世、江戸時代ですが社会が安定してくるので、物資を運搬する道として利用されるようになりました。その転機になったのは酒造の発展です。灘の酒は有名ですが、江戸時代の最初の頃は作っては駄目な地域で、百姓も酒を飲んで駄目だった。それが事情が変わって 1954 年宝暦 4 年江戸時代半ばごろになって勝手造りができるようになりました。

勝手造りの前は、伊丹、池田、西宮は伝統的な酒造地域で特権が認められていました。江戸時代の中頃、事情が変わってきたというのは新田開発が進んで米余りになってきて、値段が下がり、江戸、大坂といった大量消費地が生まれて、船による大量運搬ができるようになってきたことがあります。酒造が盛んになってくると…

時間がないので 5 番にいきます。ミニ西国観音として異例というふうには書いていますが、お寺の境内や参道に 500m くらいにあるのが普通ですが、唐櫃のミニ西国観音は急な坂道におそらく 3 km くらいに配置されています。しかもその道が実際の生活や物資の場に使われているというのは非常に異例だなと思っています。次にシュラインロードの西国観音が作られた事情というか経過というのは今でしたらたどれると思いますが当時は難しいので推測するしかないのですが、その一つとして寄進者の名前が非常に興味深いです。資料に出っていますが、例えば水車新田の親方とか魚屋さん、丹波杜氏の人々が寄進しているし 15 番は五社の油屋さん、これは単なる油屋さんというよりも幕末期の典型的な豪商です。手広く商売をやっていて、お米の江戸への廻漕とか手掛けていて、「五社の戎屋か、戎屋の五社か」とまで言われていました。27 番円教寺のところで鍋屋松というのは、有馬郡の大庄屋、これはいくつかの村を連合して兼ねた庄屋ということで、この人が西国観音三十三カ所を作る前に行者堂の石碑なんかも奉納していて大きな役割をした人だと思います。後、注目されるのは西国観音を建立した後で天保年間に大飢饉があり、有馬が困窮状態であった時にその救済に手を尽くしたと言われていました。こうした人から唐櫃道の利用者がどんな人だったかはだいたい交易によって利益を受けた人であり、その中心人物が江戸時代の古い枠から飛び出した新たな指導者として現れたことが伺われます。流通が盛んになって一方で間道が差し止めなど規制がある中で築かれた西国観音のことを思うと、物資の輸送を含めて道の安全を守る人々と宿場のお上との規制の中で築かれた西国観音というのはそうした人々の願いを見守ってきた記念碑のように思われるというのが私の感想になります。私の話はここで終わらせ手頂きたいと思います。(午前)

(午後)

再びよろしく申し上げます。自分がシュラインロードの石仏に興味を持ったのは、色々な本に紹介されているシュラインロードというのがいかにもほのぼのとした信仰の爽やかな道ということに違和感を持ったことによります。歴史的背景には今日は触れませんでした。ほぼ総括的に言うと 200 年間にわたって唐櫃道、今で言うとシュラインロード、アイスロードを通して初めて交易の道としますけれど隣の魚屋道も南北のルートですが、江戸時代ほぼ 200 年にわたり特典を持った宿駅の業者側と通す、通さないと争いが表に出たものが数件であるが実際にはずっと続いていました。例えば宿駅にそこを通ったらダメだと言われたら有馬側は分かりましたと言いながらしたたかに通していたことが延々と続いていたのです。今もきれいな道ですが、当時もきれいな道であったと思います。仏様を作るといことは荷車を牛にひかせてわっしょいわっしょいと皆で運んだ訳ですが、逆に道路工事にもなっていたのではないかと思います。宿駅側やお上から圧力がかかる中で、ここは信仰の道ですよとアピールすると共に交易の道を確保するために、崩れたところはなおしながら、狭いところは荷車が通れるようにしながらこれらの道を作っていたのではないかと、庶民の抵抗という意味でも自分たちの生活の道を守ろうという思いの込められた道ではないかな、というのが私の感じたことです。ありがとうございました。

以上